

9. SR 循環器系の疾患 (I519 心疾患)

文献

Cramer H, et al : A systematic review of yoga for heart disease. *Eur J Prev Cardiol*.

2015 Mar; 22(3): 284-95. PubMed ID:24491402

1. 背景

心疾患と診断された患者のためのヨガの効果は依然として不明である。

2. 目的

冠動脈疾患、心筋症、心不全、不整脈、心臓弁膜症の患者における死亡率、非致死的心イベント、運動能力、健康関連 QOL、および修正可能な心臓危険因子に対するヨガの効果を経験的に評価する。

3. 検索法

2013 年 10 月までの Medline/PubMed、Scopus、コクラン・ライブラリー、および IndMED を検索した。主なアウトカム評価項目は、死亡率、非致死的心イベント、運動能力、健康関連 QOL、および修正可能な心臓危険因子であった。ヨガのため/ヨガに抗するバイアスのリスク、エビデンスの質、及び推奨度は、コクラン共同計画と GRADE の勧告に従って評価した。

4. 文献選択基準

1. 冠動脈性心疾患または狭心症、心筋症、心不全および肺性心、不整脈、または心臓弁膜症を有する成人の参加者を含む研究であること。
2. 通常のケアまたは非薬理学的介入とヨガ介入を比較した研究であること。
3. ヨガの伝統、時間、頻度、またはプログラムの期間についての制限はない。
4. 非ヨガ対照群のないヨガの異なるタイプ比較は除外すること。

さらに、各研究では以下の主なアウトカム指標の少なくとも一つを評価する。

- (1) 死亡率 (心臓に関わるすべての原因心筋梗塞、突然心臓死、脳血管疾患による死亡) による死亡率。
- (2) 非致死的心イベント (非致死的心筋梗塞、狭心症発作、重度の不整脈、非致死性脳血管障害)。
- (3) 健康関連 QOL (物理的な幸福、精神的な福利、心理社会的苦痛)。
- (4) 修正可能な心臓リスク因子 (血圧、血中脂質レベル)。

5. データ収集・解析

被験者のデータ (診断、年齢、性別、人種)、介入 (ヨガの種類、内容、期間)、対照への介入 (運動のタイプ、期間)、結果 (アウトカム指標、評価時点)、を事前開発されたデータ抽出フォームを利用して、2 名のレビューア (RL および HH) によって独立抽出した。相違がある場合は、合意に達するまで第三のレビューア (HC) で議論された。ほんの数の RCT だけがレビューに対して的確とされ、異なる多数疾患をカバーする広範な研究課題に起因することが予想されたため、メタ分析は、計画されていないか、行われなかった。

6. 主な結果

通常のケアとヨガを比較した 7 つの RCT (624 人の患者) が含まれた。冠動脈性心疾患に関する 4 件の RCT では、死亡率には影響しない、狭心症エピソードの数が減少する、および運動能力が向上した、という非常に低いエビデンス、及び修正可能な心臓の危険因子が低下したという低いエビデンスが得られた。心不全に関する 2 件の RCT では、死亡率には影響を与えない、運動能力は増加させる、および健康関連 QOL には影響しないという、非常に低いエビデンスが得られた。埋め込み型除細動器で治療された不整脈に関する 1 件の RCT では、死亡率に影響しない、QOL が向上するという非常に低いエビデンス、非致命的な装置で処理された心室イベントが低いという低いエビデンスが得られた。三つの RCT が安全性について報告しており、有害事象が発生していないことを報告した。

7. レビューアの結論

現時点では、冠動脈性心疾患、心不全、および不整脈を有する患者のためにヨガを補助的に使用することについての推奨度は低い。

池田 聡子 岡 孝和 2016 年 10 月 11 日